

## 第7回府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 平成30年4月25日(水)午後3時～5時

2 場 所 府中駅北第2庁舎5階 会議室

3 出席者(敬称略)

(1) 委員13名

岩久保早苗委員、奥野英城委員、忍足留理子委員、木内直美委員、岸定雄委員、北島章雄委員、佐野洋委員、関口美礼委員、相馬一平委員、寺谷弘壬委員、長畑誠委員、西原珠四委員、三宅昭委員

大谷久知委員、中村洋子委員は欠席。

(2) 職員5名

矢部文化スポーツ部次長、古田文化生涯学習課長、平野文化生涯学習課長補佐、宮崎生涯学習係長、諫山事務職員

4 開会

事務局より、傍聴希望者について説明。傍聴が了承され、傍聴希望者が入室。

5 報告事項

(1) 生涯学習審議会委員の紹介

(事務局) 昨年度、学校教育分野から生涯学習審議会委員を務めていただいた若松小学校校長の中西裕子委員が平成30年度3月末日をもって退職され、今年度から新たに府中第六小学校の忍足留理子校長に委員を引き受けていただいた。

(委員) この4月より府中第七小学校から第六小学校に異動し、このたび府中市生涯学習審議会へ校長会より担当として参加することになった。よろしく願います。

(事務局) 事務局も異動があり、沼尻文化スポーツ部次長から、矢部文化スポーツ次長に変更になった。

(2) 配布資料の確認

- ・資料1 府中市生涯学習審議会(平成29年度第6回)会議録(案)
  - ・資料2 平成30年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会定期総会配布資料
  - ・資料3 府中市公共施設マネジメントモデル事業検討協議会への委員の推薦について
  - ・資料4 平成30年度生涯学習審議会スケジュール案
  - ・資料5 第3次府中市生涯学習推進計画案 検討の方向性について
  - ・資料6 府中市の生涯学習に関する市民アンケート調査確定値(自由記述を除く)
- ... 事前送付

- ・資料7 平成30年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会スケジュール及び内容(案)

(3) 前回議事録の確認

各委員に校正を依頼した前回議事録(案)について、市民に公開することが了承された。

(4) 平成30年度東京都市町村社会教育連絡協議会定期総会について

(事務局) (資料2「平成30年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会定期総会配布資料」に基づいて説明を行った。)

4月21日(土)に立川女性総合センター(アイム)で開催された東京都市町村社会教育委員連絡協議会定期総会に、寺谷会長、三宅副会長、岸委員、中村委員、宮崎、諫山が出席した。出席委員(寺谷会長、三宅副会長、岸委員)からのご報告をいただく。

(副会長) 講演会の東京大学大学院教育学研究科の牧野篤教授の話は、文部科学省と絡めた教育についての解説等をしていただき、いろいろ面白い解釈もあり有意義であった。「人生100歳時代を生きる子どもたちのために」というテーマで、これからどういう教育課程をやるか、その有無も含めて、人生を大まかな枠組みととらえ、こういうことをやった方がよいのではないかという提案があった。かなり濃い内容であり、短い時間ではなかなか説明しきれないが、人生100歳時代というテーマで講演会を開いていただき、非常に面白いと感じた。

(委員) いまご報告があったように、牧野先生は社会教育や生涯学習も専門に手がけ、政府の諮問機関に関与するなど、少子高齢化や地域過疎化などの課題にも取り組んでいて、非常に関係する分野が広く、講演はかなり参考になった。牧野先生は「人生100歳時代を生きる子どもたちのために」というテーマの中で、いろいろな情報を提供されていた。いくつか申し上げると、人生100歳時代と言われているが、2007年生まれ、今10歳ぐらいの子供たちは将来平均年齢が107歳になるだろうとのことである。日本の乳幼児死亡率は世界一低く100年間で1/100に減り、高齢化は進んでいる。高齢者が努力をして健康寿命を伸ばしたが、同時に平均寿命も伸びているので結局病気の期間は変わらない。人生は長くなり、100歳時代をどう生きるかということいろいろな話があった。貧困の問題、将来の不安を抱える人たちが、充実した人生を100歳時代にどう生きていくかということで、そこには様々なテーマがある。ここに資料があるので一部はこれでわかると思うが、かなり興味のある情報をたくさん提供していただいた。

(会長) 総会で牧野先生が講演されたが、平成30年度、府中市は第5ブロックの幹事として、責任をもってブロックの研究会や講演会などをやらなければならない。

## 6 審議事項

(1) 府中市公共施設マネジメントモデル事業検討協議会への委員の推薦について

(会長) 資料3の通り、公共施設マネジメントモデル事業検討協議会の委員を、生涯学習審議会の委員の中から1名選びたいので事務局より説明いただく。

(事務局) (資料3「公共施設マネジメントモデル事業検討協議会への委員の推薦について(依頼)」に基づいて説明を行った。)

本件は生涯学習審議会会長あてに依頼があった。内容は府中市が市外に保有する市民保養所「やちほ」、八ヶ岳府中山荘、市内に保有する生涯学習センターを対象に、宿泊機能・サービスの今後の在り方について、有識者や関係団体からの推薦者、公募市民により構成する協議会で協議を行っていくものである。任期や会議回数、謝礼等に関しては資料3の通りである。担当課より、推薦にあたっては、当審議会公募のご選出以外の方で1名推薦してほしいとのことである。

(会長) どなたかやっていただけの方がいればこの場で、いなければ、事務局と会長・副会長で相談のうえ、進めさせていただく。

(2) 平成30年度生涯学習審議会スケジュール案について

(事務局) (事務局より資料4「平成30年度生涯学習審議会スケジュール案」に基づいて説明を行った。)

本年度の審議会は5回の開催を計画している。以前、第3回は7月中旬、第4回は8月中旬から下旬と案内していたが、7月下旬と8月下旬に変更させていただく。第5回は10月上旬としていたが9月下旬に変更させていただく。生涯学習推進計画に関しては、10月上旬に教育長へ答申予定である。第5ブロックの研修会は、10月27日(土)または11月17日(土)にル・シーニュ内バルトホールで開催予定である。

(会長) なにかご意見や質問があればどうぞ。5回目の審議会が9月中旬となっているが、10月には教育長に答申をするので、実際の原案作成は8月下旬の4回目で終わらせ、5回目は実質的なディスカッションではなく、原案を校正したり修正したりするという進行になる予定である。

(3) 第3次府中市生涯学習推進計画案 検討の方向性について

第2次府中市生涯学習推進計画の評価について

(事務局) (事務局より資料5「第3次府中市生涯学習推進計画案 検討の方向性について」に基づいて説明を行った。)

第2次府中市生涯学習推進計画はおよそ10年前に策定され、「学び返し」という府中市独自の理念が深く議論され確立した計画である。一方で、各分野で個別計画が立案・実施され、多くの新たな蓄積がなされた時期でもある。第2次の計画は、そこまでの幅の広がりカバーしたものとはなっておらず、他分野との調整も充分とは言えなかった。第3次ではその点を踏まえ、大きく拡大してきた府中市の生涯学習行政の統合と調和をもたらすものである必要がある。「学び返し」理念の各個別分野への浸透や、分野をまたいで活用できる人材育成や活用の仕組みなどが、具体的に考えられる。

第2次の重点事業、ワークショップ、サポーター事業、ファシリテーターの事業で、ワークショップについては生涯学習フェスティバルの中での強化や、社会教育団体の支援などを通じて一定の成果を得た。一方でサポーター制度、ファシリテーター制度は、サポーターの派遣先が少ない、養成したファシリテーターの活躍の場が明確ではないなどの課題が残っている。いずれも、学校教育、社会教育等関連分野との連携が不足していることにも起因している。他分野の調和を進めていく中で、このような課題も併せて解決していくことが求められる。

#### 上位計画「第6次府中市総合計画 後期基本計画」について

(事務局) (事務局より資料5、参考1「第6次府中市総合計画後期基本計画 概要版」、参考2「第6次府中市総合計画後期基本計画(抜粋)」、参考3「府中市文化芸術推進計画概要版(抜粋)」に基づいて説明を行った。)

第3次府中市生涯学習推進計画は、第6次府中市総合計画に則った個別計画として策定されるものとなっており、総合計画に定められた方向性を踏まえた計画作成が必要となる。参考1の第6次府中市総合計画後期基本計画が、市の上位計画となっている。参考1の2ページにある通り、本計画は2014年度から2021年度までの8年間の計画期間で、2018年度から2021年度までの4年間の後期基本計画期間となる。16ページに基本目標「(3)人とコミュニティをはぐくむ文化のまち(文化・学習)」があり、基本施策4「生涯にわたる学習活動の推進」の施策として、「4.3 学習機会の提供と環境づくりの推進」となっている。施策の詳細としては参考2を参照していただきたい。「(2)めざす姿」として、世代を超えた地域交流活動、「学び返し」による地域教育力の向上、ボランティア人材の発掘と育成、生涯学習の担い手として、市民の活躍によるまちづくりがある。参考2は「(4)施策の方向性」を示しており、今後これに基づいた生涯学習計画案にしていく必要がある。第3次生涯学習推進計画の構成イメージとしては、参考3「府中市文化芸術推進計画概要版(抜粋)」のように、図やグラフなども取り入れながら読みやすくわかりやすいものにしたいと考える。資料5の2- に関しては、地域の連携と市民協働が大きな方向性になっている。具体的な計画作りにあたっては、第6次総合計画にある構成と対比できるように、第2次までの現状を評価した上で、今後の施策の方向性を、「学び返し」理念のあり方などの基本的な考え方、これに基づく施策体系、目玉となる主要事業などを整備したいと考えている。

「学び返し」については、上位計画の生涯学習施策のめざす姿の中核的な概念となっている。参考1の10ページの重点事業 に「学び返し」の機会を充実させるとあるように、市の上位計画のキーワードとなっているので、市としても第3次生涯学習推進計画においても「学び返し」は継続していきたいと考えている。

資料5の2- は、子ども・子育てなどの他の行政とは異なり、生涯学習単独の施策・事業を中心に考えるのではなく、他の行政、学校教育・社会教育全体をまとめあげ調整していくことが計画の中心となる。府中市でも、学校教育プラン、文化芸術推進計画、スポーツ推進計画、子ども読書活動推進計画、市民協働推進行動計画などの

個別計画が立案・実施されており、地域コミュニティ課など他の主管課でも、生涯学習に関する事業が多く推進されている。生涯学習推進計画の立案の実施にあたっては、教育委員会や各部署をいかに調和させていくか、調整や連携を考えていくことが必要となる。

#### 計画期間について

(事務局) (事務局より参考2に基づいて説明を行った。)

文化・学習分野の各計画の計画期間が記載されている。上位計画である第6次総合計画の期間に合わせているため平成33年度までというものが多くなっている。上位計画は8年間で前期・後期で4年ごとに分け、PDCAサイクルに基づき策定を行っている。第2次生涯学習推進計画までは期間は10年間だったが、第3次生涯学習推進計画からは、上位計画の考え方に基づき、8年間の計画期間とさせていただきたいと考える。

#### 計画策定において検討すべき課題/テーマ

(事務局) (事務局より資料5に基づいて説明を行った。)

国の動向に関しては、生涯学習は、考え方としては学校教育・家庭教育をつらぬくものだが、実際の政策としては社会教育分野や、社会教育施設などの社会教育行政を中心に検討されている。その中で近年非常に強くなっている傾向として、地域貢献、地域の問題解決、地域との連携といった考え方がある。具体的には、地域の社会教育について、地域課題の解決につながる実践的な学習が最大の重点とされている。文化芸術振興やスポーツ振興、図書館運営などそれぞれの個別政策についても、他の分野と連携し、地域の課題解決や地域振興を行うことが重要視されている。もうひとつ特徴的なのは、社会教育以外の行政分野においても、近年の例では働き方改革のように普及啓発施策が重視され、生涯学習事業に近い事業が行われることが増えていることである。この状況を踏まえ、社会教育を中心とした生涯学習行政では、地域振興との関係性を重視する。それを踏まえ、教育委員会、庁内の他の部課との連携、地域の住民や、民間団体との事業協働を進める。別の言い方をすると、分野内だけで完結するのではなく、積極的に他とつながることが強く求められている。同じ流れは学校教育についても当てはまる。学校が抱えている課題は学校だけでは解決できないという認識を前提に、学校と地域の団体や社会教育機関をつなぐ政策が進められ始めている。府中市でも、市民協働宣言や第6次総合計画でも示されているように、市民協働は基本施策のひとつとして非常に重視されるようになってきている。これを踏まえ、今回の計画では、他主管課の事業や地域住民や、民間団体との協働や連携をどのように具体的に進めていくか議論することが重要となる。

(資料6「府中市の生涯学習に関する市民アンケート調査確定値(自由記述を除く)」に基づいて説明を行った。)

まず最初に訂正をお願いしたい。9ページ下から4行目と、11ページ上の方、左

から二列目の項目「市の支援による講座や教室など」のところを「誌」から「市」に訂正をお願いします。

資料6の1ページ目、調査の対象は18歳以上の市民2000人、回収数666、回収率33.3%となった。

調査結果はパーセンテージで示しているが、府中市民全体に対する比率を表していると考えます。調査集計については性別など属性別と設問に基づいたクロス集計を実施しており、例えば年代別の結果の比較ができます。今回の設問については、シングルアンサー（回答をひとつ選ぶ）とマルチアンサー（複数の回答を選べる）がある。シングルアンサーは回答をすべて足すと100%になるが、マルチアンサーは100%にはならないのでご注意ください。

結果全体では、生涯学習の実施状況、生涯学習センターなどの施設の利用状況をみると、総合計画で課題とされていたと同様、勤労世帯の生涯学習活動の少なさがみられる。子育て世代に関しては、属性で子育てをしているかどうかの設問を設けていないため、今回の調査では出ていない。

33ページ、34ページ「今後、市民の「生涯学習」活動をもっと盛んにしていくために充実してほしいサービスはなんですか」は、若年層は「情報の発信の充実」が多くなっている。関連して38ページ「市の「生涯学習」に関する情報提供の手段で、力をいれるべきだと思うのは何ですか」では、若年層は「SNS」が高くなっている。このことを踏まえ、若年層には市の生涯学習の情報が十分に届いていないということが考えられる。この対応は課題となる。

43ページ「生涯学習を通じて身につけた知識・技能や経験を自分以外のために活かすにはどのようなことが必要だと思いますか」では、一番多い回答は「地域活動・ボランティア情報提供の充実」(51.2%)である。これは生涯学習の成果を社会に戻すためには、地域活動、ボランティア活動などによる市民協働による地域づくりが重要と、市民の多くが考えているという解釈ができる。今後市民協働を進めていくにあたって心強いデータである。

46、47ページ「市が掲げている「学び返し」という言葉をご存知でしたか」については「知っていた」(5.7%)、「聞いたことはある」(7.5%)と低い数値である。ただし、6ページに「どのような「生涯学習」をしたことがありますか」で、「していない」は19.2%だが、その中で8ページの「学び返し」の言葉の認知者は、生涯学習をしている確率が高い。

39ページ、「生涯学習を通じて身につけた知識・技能や経験を自分以外のために生かしたいと思いますか」は「活かしたい」が全体の80%となっている。

40ページで、「学び返し」の言葉を認知している人は、「活かしたい」は92.1%と高い。「学び返し」への理解が、生涯学習の活性化につながるということもここから解釈できる。48ページ「「学び返し」をしたことがありますか」という問には、全体では12.2%になっているが、49ページ「学び返し」の言葉の認知が高い人は26.3%と多い。この点から考えると「学び返し」の理解を市民に広げる事業を実施することで、生涯学習全体の活性化と、その成果を社会に返す「学び返し」の実

践を増やすことができるのではと考えられる。

- (会長) 第3次府中市生涯学習推進計画案の検討の方向性については、第2次の評価をどうするかなど、これまでいろいろな発言をいただいた。それとともに、第3次の推進計画策定のあり方を説明していただき、その後アンケート結果がより完全な形で出て、皆様に事前にお送りしてある。この辺のポイントについては様々なご意見・ご提案ないしご批判があると思うが、どなたでもどんな順序でも結構なので発言いただきたい。
- (委員) 「学び返し」という言葉にこだわっているように聞こえたのだが、それは間違いないか。
- (会長) 間違いないと思う。
- (委員) アンケートを見ていて「学び返し」の認識が低いということだが、分母が小さいということはないか。「学び返し」に当てはまる人が少ないという可能性があるのではないかとアンケート自体を見て思った。
- (会長) 全体の上位計画との整合性から言えば、すでに書いてある。
- (委員) 「学び返し」を全ての人が認識すること、理解すること、周知することによって、「学び返し」が進むというように聞こえた。「学び返し」という言葉自体は全く悪いとは思わないし、当てはまる人もいると思うが、自分では「学び返し」が当てはまらないのではと思っている人、少し若い世代などは言葉のイメージとして、自分とは関係ないと思われがちの部分があるのではないかと思う。アンケートを見て、「学び返し」という言葉を知ったとしても、自分が当てはまるか当てはまらないかという部分で、広がりが思ったより狭かったかもしれない。
- (会長) 確かにアンケート調査の結果は、特に若い人が少ない。
- (委員) みんなが「学び返し」を知ったとしても、自分がやりたいというところまで持っていけるかという部分で、分母の広さということでは、「学び返し」という言葉自体のもっているものが少し狭かったのかなという気がした。そこにこだわりすぎて、全ての人に「学び返し」を知ってもらったとしても、自分に当てはまると思う分母がさほど多くないのであれば、広がらない可能性はあるのではないかと思った。「学び返し」自体はいいのだが、もう少し分母を広げるような言葉に変えることも必要のかなと思う。アンケートの内容を聞いて、この言葉を聞いてすぐに活発に活動するかというと、「学び返し」に当てはまると思った人はすでに活発に活動しているが、すべての人に「学び返し」の言葉を知ってもらえたとしても、どうかと少し疑問に思う。根本的なところだが、そこを少し検討してもらえるとよい。
- (委員) 先ほど説明があったように、「生涯学習に参加してみたい」という人は80.5%いる。それから、「他人のために得た知識や技能を自分以外に生かしたい」は79.7%と、かなりいる。人間というのは学んだことを、いろんな地域のために活かしていく。人類が発達してきたのは、まさにこのようなことができるからだ。その思想は80%近い中で生きていて、そういう認識はある。しかし、「学び返し」という言葉を知っているかということになると、92%は知らないと言っている。何年か前のアンケートでも7%ぐらいしか「学び返し」をやっていないというデータが出ている。「学び

返し」は色々なものを学んでそれを伝えていく。これは、生活の中で現役の人も高齢者も、みんな何らかの形で実際にしていると思う。では「学び返し」を生涯学習で大きな柱としてやる必要があるのかというと、これはまた別の話だと思う。「学び返し」というのは、すでに若い人から年寄りまで、人類が生まれながらに行っていることであり、それをなぜここでやるのか。今まで生涯学習の中でこれを取り上げようとする、今まで現役時代にやってきたことは更にそれを「学び返し」で何か地域のたためにとっても、もう通用しない。だから「学び返し」というものが実際はやっているのに、伝わっていかないのだと思う。絶対に必要なことなのでこれはこれで残すべきだが、大きな柱ではなく小さな柱にして、もっと重要なものがあるのではないか。

アンケートを見ても、かなり批判的と思われるような意見や、行政に対する不満のようなものが出ているが、これはおかしいなと思い、何回も見直した。その中で見えてきたのは、行政に対する不満でもなければ生涯学習の在り方についての疑問でもなく、彼らが現実には直面している将来に対する不安や、仕事などでうまくいかない、給料も上がらない、そういう中で、自分たちの希望するものはそういうものではないと訴えているような気がする。だから、その点をきちんと汲み取っていかねばならない。生涯学習の計画の中で「学び返し」をなくすのではなく、太い柱を少し細い柱に変えて、もっと今の市民が本当に望んでいるものやっけていかねばならない。92%の人が興味を示していないという現実には汲み取っていかないとはいけないと思う。

(会長) 地域のつながり、地域に還元していくという話では、21日の定期総会の講演で東大の牧野先生は「恩返し」という言葉をお使いになったが、「恩返し」より重要なのは、地域への還元ではないか。学校教育、家庭教育などが大変変化し、地域のつながりが疎遠になりつつある中で、特に高齢化社会においては、その人たちが持っている重要な知識や技術を地域に還元していくのは大変重要なことである。答申を作ったのが、平成23年の「学び返し」の第4期答申になっている。その前から府中市の中に、上位計画で「学び返し」という言葉が出ている。これを全くとってしまうには少し惜しい。アンケート調査で「学び返し」をやったことがあると答えた中に若い学生がいたので驚いたが、どんなことをやったのか、後でコンサルタントの先生方に少しお教え願いたいと思う。

(会長) 今日は大変大きな問題を論じているが、委員のそれぞれの方の反応、あるいはアンケート調査の結果をこういう風に読んだというようなことで、どなたでも結構なので、参考意見を言ってくださればありがたい。

(委員) 「学び返し」については、低い認知度を上げるということではよいのではないかと。必ずしも、施策の結果自体に直接的な反映がなくてもいいだろうと考える。稲城市では介護ボランティアを活性化させたところ、ボランティア育成に使った予算規模を超えて、介護保険料の支出が減ったというようなことがニュースになっていた。それが何を意味しているかということ「学び返し」が暗黙のうちに行われ、それが金額になって現れたということだと思う。「学び返し」をしてください、というやり方ではなくて、



結果的にそうなったということで十分目的は達している。そのことから考えれば、むしろ施策立案側の考え方として、常に「学び返し」というコンセプトは持っている、ただし細分化された施策の目的は「学び返し」という言葉を認知させるということではなく、結果として地域の教育力が上がったとか就学率が上がったとか、ダイレクトに測れる数値が必ずしも上位概念に直結していなくてもいい。むしろその方が健全のような気がする。大きい概念が、末端の施策まで同じように浸透するものではないのではないのではと考える。

(委員) 資料6を読んでいて41ページの問17は、前の問16「生涯学習」を通じて身につけた知識・技能や経験を自分以外のために活かしたいと思いませんか」を受けているが、一番多かった回答は「日常生活を通じて」である。この中で「地域活動・社会活動を通じて」も3割いるが、一番多いのは「日常生活を通じて」である。前の質問で「自分以外のため」と回答しているのに、日常生活というのは一体何を意味しているのかよくわからない。もしかしたら、その人達は何らかの形で身近で「学び返し」をやっているのかもしれないが、意識していないだけかもしれない。同じような質問で12、13ページ問4「生涯学習を通じて身につけた知識・技能や経験をどのように活かしていますか」という経験の方を聞いている。これも「家庭日常の生活に活かしている」というのが全体でも4割ということなので、この辺は、今後ヒアリングをされるのであれば、実際にどこに活かしているかということが見えてくるとよい。地域社会でどのように活かしてるか、ということも、もちろん知りたいが、本当は意識していないが、日常生活でも周りに還元されて実は周りの人にも影響を及ぼしている、そういうことが見えてくればそれはそれでひとつの「学び返し」が既に起きていると言ってもいいのかなと思う。

(委員) アンケートの回答に関して、回答総数は666で、30・40代で270～280ほど、50・60代で240ほどということで、現役世代の回答であるということ念頭に解釈しなければいけないのではないかと。30・40代の人、50・60代の人、定年後の方にとって「地域社会」の概念はそれぞれ違うのではないかと。「地域社会」という言葉も「学び返し」と同じくらい漠然としていて、むしろ「学び返し」の方が概念としてはしっかりしているかもしれない。それを踏まえて、アンケート結果の読み方に工夫がいるのではないかと。かなり現実的に「こうしてほしい」という回答が出てきていると思う。生涯学習センターなどを使っていないという意見があるのは当然で、働いている時は使えない。そういう意見があるのであれば、施設の稼働時間を増やすなどの提言につながるのではないかと。

(委員) 最初に、推進計画をどう作るかという議論をして、第1次ではカレッジ府中ということで全体のコンセプトをまとめ、2次では「学び返し」というコンセプトで全体の計画を作り上げた。第3次はそこから離れないとだめなのでは、と最初から申し上げている。「学び返し」はいい面がたくさんあると思うが、残すとしても、第3次生涯学習推進計画のコンセプトは何かということやはり、人生100年時代、非常に長い時代を人々はどう学んで自分の自己実現を果たしていくか、そこが非常に大事な課題ではないか。その一つとして「学び返し」もいいが、正面に据えて計画を作ってしまう

と、一般の方が生涯学習から離れていってしまうというか、違和感を感じてしまい、生涯学習は「学び返し」でしょうということになってしまっはよくない。人生100年時代などの新しいコンセプト、高齢になっても新しいことを学んでいかなければいけない時代、そうしないと持続可能な社会は作れないという状況になっていると思う。新しいコンセプトを作って欲しい。

(委員) 市の説明を聞いて、今までとどう違うのか、と思う。戦略発想がほとんど感じられない。アンケートを読んで、これは活性化していないということを言っていると思う。それを現実問題として謙虚に受け取らざるを得ない。これを、どうやって突破するのか。人生100年時代は、とても良い切り口だと思う。突破すべき課題をもう少し明確にしたほうがいいのではないか。

(会長) 例えば、突破したい課題とは具体的にはどういうことか。

(委員) アンケートを讀んでいて意外だったのは、興味があることには参加してみたいとみんな言っている。今までスポーツなどは「学び返し」の概念に入っていない。生涯学習の概念が今まで狭かったのではないか。もう少し、スポーツや健康などを入れた包括的な概念にして、生涯学習全体を組み立て直すということがあっていい。そうしないと、今までの生涯学習では楽しくないから、みんなが参加しない。それを考えた時に、諸団体とパートナーシップ協定を結ぶとかいろいろなことをやればいい。そういった戦略的な切り口がもう少しあっていい。

(委員) 府中市の総合計画の8ページ7「多様な人材が活躍できる社会の実現」は、まさに生涯学習で考えなければいけない問題である。社会で活躍できる人材を、生涯学習を通じて育てる、発掘していくということが生涯学習の重要な役割だと思う。これからは少子化で人が足りない。女性、高齢者をはじめとしてみんなに活躍してもらわないと日本が成り立たない。府中市は、人口問題はまだ深刻さがそれほどではないが、近い将来問題になるのは間違いない。そういう面からいくと、みんなが社会で活躍できる社会、そういうものは一つのテーマになると思う。

人生100年時代にどう生きるか。定年になってからまた同じぐらいの時間があり、そこをどう生きるか。現役の時代から考えないといけない。昔と違い、技術は売れない。そういう人たちが何をどうやって「学び返し」をするのかとなった時に、重要なのは、現役の人も含めて100年時代の人生をどう生活設計していくのか。それをまず学ばなければいけない。新たに知識をつける、資格をとるなどしないと、生きていけない。例えば介護など重要なニーズがあるが、生涯学習の中でそういうものを100ぐらい具体的に取り上げて「あなたは100のうちどれを目指しますか。」として、それではこういう勉強をしてというふうに、目に見える形でみんなが取り組めるようなものを描いていかないと、「学び返し」といった漠然とした中では、少しとつきにくいし、取り組みにくい。

(会長) 私たちがやるのは、学校教育、家庭教育、企業教育で抜けているところをどのように大きくフォローアップしていくかだと思う。

(委員) 「学び返し」というキーワードは、上位計画から外せないというのはわかったので、私はこのままでいいと思う。「学び返し」とは平成25年の資料では、地域社会で学

んだことを地域に返すことという定義である。キーワードは地域に返す、個人的な知り合いに返すのではなく、地域に還元するというのが、おそらく「学び返し」の肝だと思う。府中市総合計画の10ページに、「学び返し」の機会を充実させると書いてあるが、これが大事だと思う。機会を充実させるには何をすればよいか。アンケートを見ると私も同意するが、施設には、夜もやって欲しい、土日もやってほしいというのがある。生涯学習センターは夜まで開いているが、週末は7時で終わる。あそこから夜一人で歩いて帰ることは危険で、車を持っていないと利用できない。そういうところからはじめて欲しい。ちゅうバスを夜だけ増便する、駅前までのバスを用意する、土日を解放する、夜開放されている施設をもっと知らせるなどの工夫が必要である。SNSや広報も、市がやるのではなく、いろいろな講座や活動している方の意図を取り入れた形で、民間レベルでやってほしい。市役所に勤めている方は夕方には帰る。府中市に夜帰ってくる人たちとは感覚が違うと思う。外で働いていると、市で何をやっているのかわからないし興味も持てない。土日になれば「どこかで祭りをやっているのかな」程度感覚だ。これはすごくもったいないことだと思う。

- (会長) おっしゃる通りである。センターの中のレストランなどにしても、もっと安くして美味しいものを入れてほしいと、いつも言っている。武蔵野市の図書館の中には1階に食事するところがある。おそらく民間が入っている。市によっていろいろある。
- (委員) 府中市も、図書館は遅くまでやっている。ルミエールは9時半まで開いている。夜行くと人がいっぱいいる。会社帰りに寄って本を借りて読んでいる。それだけ学びたい人はいっぱいいる。ただし市の施設は利用しにくい。ずっと言われているのに改善されない。ぜひ、今回この審議会でそういう利便性を上げるような、機会を充実させるために何が必要かという検討をしてもらいたい。
- (事務局) 「学び返し」をいかにブラッシュアップするかが今後の方策となっていく。今日示した参考2の「(4) 施策の方向性」の4項目が上位計画であり、その方向性と、今後皆さまにご協議いただく第3次生涯教育推進計画をどのような形で実施計画に持っていくかというところを、再度確認させていただきたい。一つ目は民間活力の活用ということ、二つ目は学習成果を地域に還元するという「学び返し」に該当する内容、三つ目はイベント、市民の方々の協働による運営ということで、いろいろな地域の方々のご理解ご協力、協働という視点がある。最後に施設の老朽化というところで、学習センター等もあると思うが、以上のような点について第6次総合計画で方向性を示している。これを受けて、第3次生涯教育推進計画を策定していく上で、どのようにしたらいいか。このような観点からご意見をいただければと思う。
- (委員) 学び直しの機会を拡充することと、能力提供の場を拡充するということを提言すればいいのではないかと。我々が一つひとつ技術的なことはできない。最近の人工知能の仕事だと、大学教養から専門ぐらゐの数学の知識が必要だということ。例えば、この歳になって積分をやりましょうという時に、それができる体制を作って現実社会の需要に応じた学び直しの機会を拡充するなどの提言の方法でいいのではないかと。何をやるかは分野ごとに違うので、それは細い施策として、方針としてはそのぐらゐの自由度でいいのではないかと。私たちが細かいところまで決めることはなかなか難しい。

(会長) 難しいし実際できない。予算に限りもある。

(委員) かなり抽象度の高い提言の形でしかできない。その観点でないと、なかなかまとまらない気がする。

(委員) もちろん、具体的にちゅうバスを出せということではなく、もう少し自分にも機会があると思わせることをして欲しい。そういう話を考えていきたい。AIの仕事をしたという時に、積分が必要だとして、ではどこへ行けばいいのか。こういう仕事をしたいけれど、どこへ行けばいいのかという時に、府中市が生涯学習センターで講座をやっている、もしくは、提携の講座があるというようなことが選択肢としてあるのが望ましい。一番の問題は、既にそれを実行しているとしても、市民に届かないことだ。アンケートには、SNSをもっとやれ、情報をもっと充実しろと書かれているが、何で情報が届かないのかが疑問だ。いざ地域活動に関わってくると、皆さん頑張っているいろいろやっている。知っている人は知っていて、口コミのネットワークがある人は情報を知っていたりするが、普通にしていたら情報は得られない。

(会長) SNSより広報ふちゅうの方がやや詳しいと、両方見ていて感じる。若い人は新聞を取っていないし、どこで配布をしているか知らない。

(委員) 府中市のホームページが悪いとは言わないが、検索しづらい。正確な言葉で正確な情報を掲載するなら、ああいう形になるというのは理解できる。しかし私達はもっと、早く有用な情報が欲しい。

(会長) コンサルタントから分析した感想をお聞きしたい。

(コンサル) フリーアンサーの部分はまだ見ていないので、途中での話になるが、「学び返し」が市民に認知が低いのは、言葉を知らせることが今まで重点施策として行われてきていないので、市の生涯学習事業に直接触れられた人しか知る機会がなかったためだと思う。今後の考え方としては、「学び返し」という言葉だけではなく、府中市内で学習の機会があり活躍の機会もあるということを皆さんに知っていただけるように広報をやるというのは、一つ検討の方向性としてあるのではないかと。その結果として、「学び返し」が市民理解の上で効果的なものとなるのかどうかはわからないか。先ほど市の事務局からも報告があったが、社会教育全体として地域社会をどのように良くしていくかということで、他の行政分野と連携するというのは中央教育審議会などでも答申が出ており、やる方向になっている。府中市が、地域に結果を返すということを10年前にすでに出されているというのは、今の国の動向を先取りしていたということである。せっかく今その時代になったので、捨てるのはもったいないと思う。

「学び返し」は、他の具体的な個別の施策と連携し浸透する時間があまりなかったため、実感を得る機会が少なかったのかもしれない。まさに日本全体がそういう方向に動いている中で、地域の理念として確立しているものを、もっと実効性の高いものにするために第3次計画の中で進めていけば、非常に手応えのある施策になるのではないかと思う。

(事務局) いろいろとアンケート調査や配布資料をもとにご意見をいただいた。資料4に示したとおり、今回は体系図案や構成案などについて、またいろいろとご意見いただ

きたい。今回いろいろな角度からご意見いただいたところも踏まえつつ、また次回までの間で市内の公共施設やいろいろな団体のヒアリングを行い、どんな事業をやっているのか、またそういった成果の中から「学び返し」につながるものがあるかどうか、現場に行ってヒアリングし、そういった情報も皆様に提供しつつ、第2回では、体系図構成案といったところでまたご意見をいただきたい。次回もよろしくお願いしたい。

(会長) これで結論が出たわけではなく、暫定的にまとめていただき、また続きを審議していきたい。

(委員) ひとつだけ、「学び返し」という言葉を聞いて、専門的なことがわからない人が聞いた時、なにが主体なのかわからないというところがあるのではないかと。たくさん学んだ人が地域に還元するのは分かるが、学ぶ人にとって「学び返し」とは何なのか。もっと双方向的なイメージが沸く言葉の方が、分母が広がるのではないかと思う。言葉自体が一方通行的な感じがする。もう少し双方向に、教える側も若者から学び、教わる側も高齢者から学ぶ。「学び返し」という言葉は、なにも知らない人が聞いたならそういうイメージが湧かない。主体がわかりにくい。三鷹市などのようにテーマをそのまま名前にして、たとえば「学び返し」プラザのように、建物に名前をつけるくらいの意識で町の人みんなに知ってもらうのがいい。いずれにしても分母を広げるような言葉にして、みんなが利用したいというイメージが良いのではないかと思う。

(会長) 地域や自分のためになって、面白くて、人を呼び寄せるような、そういう場所になれば一番いい。

## 7 その他

### (1) 平成30年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会の概要検討

(会長) 市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会は、府中市が担当する。10月から11月に場所を予約しているが、何をどのようにやるかは事務局からご案内する。

(事務局) (事務局より資料7「平成30年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会スケジュール及び内容(案)」について説明を行った。)

平成24年度に開催した時にお囃子をやったので、一案として入れている。来月中には第5ブロックの他市に日程調整したいので、本日もご検討いただきたい。

講演会、発表会はあくまで皆様に諮りながら決めていきたい。講演会はメインテーマが「知の共鳴～『学ぶこと』『つながること』その先へ」であることを考えた場合、講演会としてそれにふさわしい先生をお呼びして講演会方式でやるのか。または学ぶ、つながるという視点で考えたとき、せっかく皆様が市にお運びいただくということで、府中市の伝統芸能のお披露目としてお囃子をやったという経緯がある。例えばこういった、学ぶ・つながるとなったとき、舞台演出の他に、交流形式なども含めて事務局として模索中である。そういったところで講演会・発表会などとして。今日は具体的な内容はご提示いただければ検討し、時間がなければ、事務局と会長とで協議していきたい。

(会長) 前回の審議会でも少し検討したが、私達が決定するのは講演会、発表会である。テ

ーマにそったブロックの他市のメンバーに示唆できるような案があったらここ提案してほしい。

(委員) 発表会を見て施設を見るだけでは研修になるのかなと思う。もう少し双方向のワークショップ的なものをやらないと、最近の研修会らしくないのではないか。

(委員) 来場する方々はどんな層か。

(会長) お客さんは、皆さんと同じように府中以外の各市の委員の方々である。

(委員) 年齢層と何人くらいが集まるのか。それがないと我々の興味があるものを提案して外的外れになるかもしれない。

(事務局) 第5ブロックは府中市を含めて6市、調布、狛江、武蔵野、小金井、三鷹である。その社会教育委員と事務局で都合のいい方、合わせて60人前後になると見込んでいる。

(会長) 調布市は市民と子どもたちの劇で、非行少年を社会で包むような内容だった。大体は講演か、子どもたちを連れて山に行ったとか森林で共同作業したとかである。府中は白紙なのでいい案があればうかがいたい。

(副会長) 統一テーマ「知の共鳴～『学ぶこと』『つながること』その先へ」というのが決まっているので、その流れを作ったものが望ましいという提案がされており、踏襲しないといけないかなと思う。

(委員) 地域の特色を紹介するような、そういう形が、いつもあるのか。

(会長) ある。

(委員) 府中市ならではのものができればご紹介したいということか。

(会長) 狛江は、高校が一つしかないため、中学生と高校生のコミュニケーションがあまりない。子どもたちが集まる場所を作りたい。駅前にある市の図書館の一部を作り変えるという話だったが、まだできていない。事務局に言ってくれば検討する。

(副会長) 第5ブロックとして社会教育委員がいらっしゃる。その人たちも参加して一緒に作り上げてほしい。

(委員) やはり「学び返し」かな、と思った。「学び返し」で府中市で、できたことをアピールできたら面白いかなと思う。

(委員) 武蔵野市に参加したところ、発表会形式だったが他市の事例が非常に勉強になった。できれば他市の事例を皆さんにお伝えできればよい。発表会形式だと負担かもしれないが、ワークショップなど、学ぶこととつながることがテーマなので、ワールドカフェ形式で、他市の方と交流してお互いに学ぶ・つながるという方向性がいいのかなと思った。

(委員) 先ほどの施設をどう使いやすくしていくのかとか、そういうことを含めて聞いたらおもしろいかもしれない。

(委員) 府中市らしいということならば、くらやみ祭りの地域との間の活動がある。あれは府中らしいし、そういうものをやればわかりやすい。伝承があり、子どもたちに大人が教える、立派な地域活動である。バルトホールは何人くらい入るのか。

(事務局) 約280名である。今後の事務局の予定を先に申し上げると、今日はスケジュールと、候補日の日程の確認をご了承いただきたい。日程を一つにしない理由は、幹事市

になっているため、他市に選択していただけるように、二つの日程をご提案しているという状況である。来月中旬には、こちらの内容をご提案する。発表会・講演会でご意見等あれば、ゴールデンウィーク明けくらいに事務局までお知らせいただきたい。特段ないようであれば会長と協議ということでもよいか。

( 同意を確認。 )

(事務局) では、そのような形ですすめさせていただく。

( 3 ) 次回の開催について

次回は6月下旬に開催する。候補日は6月20日(水)、27日(水)28日(木)である。委員の都合を挙手にて確認した。本日欠席の委員もいるので、確認のうえ事務局で調整し、日程は決まり次第連絡することとなった。